



近世  
見聞  
南紀往生傳  
二





近世南紀念佛往生傳卷之二

目誌

本傳二十一人附傳二人  
合二十三人

即厭上人

二十

即山法子

十七

智海法子

十九

報雲法子

智采法子  
二十二

智圓禪尼

二十四

了然信士

二十六

壽光信女

三十

妙仙法尼

三十二

真心信女

其夫  
三十二

誓因信尼

三十八

靈賢居士

四十

長三郎

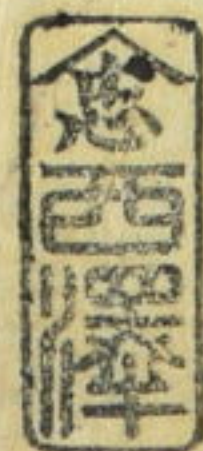
四十二

加根女

四十七

岳音上人

四十九





心瑞西堂 五十二 常念房 五十四丁

佐兵衛 五十七 本名法尼 五十八丁

本性法尼 六十二丁 令證童子 六十五丁

完道上人 六十六丁

以上目誌畢

近世南紀念佛往生傳卷之二

即厭上人

師諱<sup>し</sup>義便<sup>ぎべん</sup>と稱<sup>なづ</sup>て<sup>る</sup>。洗蓮社塵譽<sup>せんれんじやちんご</sup>と號<sup>なづ</sup>と。紀州海士郡安原村の人なり。幼<sup>わか</sup>みて和歌山孤雲山西要寺<sup>こくうんざんせい</sup>に入<sup>い</sup>り出家<sup>しゅげ</sup>し。道芽<sup>どうげ</sup>を<sup>ま</sup>ふ<sup>ら</sup>ふ<sup>に</sup>。壯年<sup>さうねん</sup>東武<sup>とうぶ</sup>ふ<sup>ら</sup>ふ<sup>に</sup>。頃<sup>ころ</sup>貞極上人<sup>てんごくじやうじん</sup>に隨<sup>ま</sup>りて宗教<sup>しゆきやう</sup>を研究<sup>けんきゆ</sup>し。往生淨土<sup>しやうじやうじゆんじゆ</sup>の要術<sup>やうじゆつ</sup>の悟真光明<sup>ごしんくわうみやう</sup>の跡<sup>あと</sup>を<sup>た</sup>づ<sup>ね</sup>ぬ。一向專修<sup>いぢやうせんじゆ</sup>の法門<sup>ほふもん</sup>の黒谷吉水<sup>くろやにきちずい</sup>に<sup>ま</sup>ら<sup>ぬ</sup>を<sup>ら</sup>ふ<sup>に</sup>。學<sup>まな</sup>ぶ<sup>に</sup>。後<sup>のち</sup>故郷<sup>こきやう</sup>に歸<sup>かへ</sup>り。師席<sup>しじやく</sup>と補<sup>おほ</sup>ふ<sup>に</sup>。此<sup>こゝ</sup>



寺に住持し。自利眞實の要法を以て。普く利他の  
勸誡にまゝならんことを。道德一時に高く。法益現  
験のすく多かり。ゆゑに貞極上人の帰投のむかひ  
深かりければ。此寺に住持のらも。うまひ關東ふ下  
向し相見せん。同聲相應し。同氣相和し。しる  
のつひや。此地も澄月。性山。待雲。體信等の隠操  
の諸上人とまじりて。常に法問をた後世物語の  
まゝに。道心もまゝに。屠邊のまゝに。麻中  
のまゝに。好悪何ふも。古語のまゝに。心ふまじ

う。あられ寺勢をつね。衣と千尋の岡ふらふ。足と  
萬里の流に濯ふ身と。専修念佛せむ。とま  
ま。師範の隠士老邁なり。まゝに。まゝに。まゝに  
出にまのびず。思ふまじりな。まゝに。まゝに。まゝに  
まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに  
思村と。我此寺に住持のら。まゝに。まゝに。まゝに  
あづかり。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに  
まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに  
向し。信施の罪をも。つものまゝに。心願と。まゝに。まゝに



せんとも。いふ言葉。これこれの山に出たり。檀越  
 何し。後。報。觀世音の御告。此説法の。とり。始。尋。師  
 心願の冥慮。感喜。日々講  
 筵と。專修念佛を勸進。に。道俗先と  
 あり。老少。結縁。一。結縁。一  
 一。四ヶ年と経。一千座。究竟  
 目出度。結縁。向。後。宿志。熊野詣  
 と。熊野の。深山。幽谷。

ち。多。我衣類。悉く施  
 一。人。道。多  
 あり。不日。慈心。身。赤裸。旅行  
 相隨。切。其心。大施。太子  
 風情。山。又。山の難所



とまゝ。三社の寶前ふれづも。おもむく法樂したるも。  
 ぐらや證誠權現家津の御子。本地阿彌陀如来  
 ありし。深き誓のかりやせげ。此御山ふ詣て道  
 心といふ草の流に掉さんざり。別々此年  
 あり席とつよの千座の法施。又道まづの無縁  
 の慈悲。ねとむらねし。三社權現をわめむた  
 知見したる。んとあり。師三山叅詣し  
 由急なく遠らけ。又寺に歸られ。幾ほくをひ  
 とも忍そ。つらつら。弟子ともあそむ。

ろの尋し。しれども。まの行方とまらば。年来親し  
 深うり。道俗をけきうめ。詮を。のく。あるべし  
 ふあづ。跡ふ。僧と。住持と。ね。  
 師時年三十二歳。身心勇猛。諸國草藪の身  
 と。或れ岸打波。心を。青海原を觀し  
 念佛し。又れ深山の奥。禽獸と友して  
 稱名と。きの。一寺の。弟子同法。奉  
 事せん。有信檀越に。歸依崇敬せん。身は。ア  
 形影相。境界。賤が。軒端の草枕。



かぐねわづりのりちぶるとうし。海士の筈屋のりれ宿  
 みれ。そぎきみふのれうは悲しめて。専修念佛でん。  
 其心いりむりふと子渡らん。思ふもたふさ。きくも  
 うらやまいた風情をり。  
 けても諸国遊行の間縁に隨請に應じて。化導と施すれけ  
 きの得益のれ多しとふぎふたをたしもあまそ有る中。つづ  
 ららん其所へきもしぬ。東國まで行暮りじふ。里の長れ  
 門ふらう。一夜のやぶりとここれるに。今宵もそりまたと  
 くの侍もれ。得しものいりかきせむ。りぶの中と

いりやまていもいりちれふ。思ふもたふさ。きくも  
 他の家についははたなとこりけ。あられ男  
 くと師の道相とえさあうせむ。きや案とてい。く。  
 のいふ人もみ古寺あり。いりわびるねどもそ思  
 へる。立入る一夜と明したる。いり幸のこい  
 くとやがみ寺に入るとれを。ゆふ年久しく住  
 りじたる。いりて。つら落るは霧不断の香とれ。  
 麻やぶれり月常住の燈をのぐ。いり心も  
 渡す。夜もて。至心に念佛をいり。ふ更けり。いり



むろりのころ。天井のうくに大石ををるるがぶらした音も  
 もり。何事とやとあだるれば。たぐ大なる手とさ下り  
 り。うらとさりたれども。師ともも驚動せざりと思つ  
 く。これなん人とさり喰ふ鬼とふあをん。何ある業  
 障みく。おくらとさりた。鬼趣ふ墮とさると悲心を  
 ぞ。さうふ念佛せり。ふ。やうり。其より類を  
 大なる僧の白衣著るが。眼のまふあうれ出。師の後  
 へ。うら。右のうらり顔うらりし。さうと詠と  
 とも。何ういぬ。も驚く。寂然と念佛とさるふ

のもし。忽ち常人のぶらかり。師の前より三拜  
 一々れば。高聲ふ十念を授与せられ。謹く拜受  
 一終。うら。我れ當寺三代前の住持なりし  
 ころ。此堂を修復せむとあり。普く勸進し財  
 寶をうり集り。諸縁の具せざれ。時を  
 ころ。其財を此堂の後ける柱の中に置き  
 け。つくほむ。身まらぬ。その妄執今につまぐ。中有  
 ふあり。うら。道心。僧あり。その財のある所と告  
 ん。思。我次に住る僧。我出するを



忽ら悶絶し。それ次の僧ハ逃失し。後ハ一夜と  
明も人たもなかりし。師ハ幸道德いよくありしを  
代願くいの財寶とり出し。堂を再建し。我後  
世をもつひいふと。つれもづろに告終す。  
のたけらしんぞんばなりぬ。師も希異なるを思ひ。  
しやく高聲念佛とふ。やうく暁ぐにふ宿とを  
する家より。茶やかきせん。と来てふと告ふ。  
やぐのふつれいふ。あうい殊の外にうやむい  
づも御僧ハ人いれらじ。あの堂も。むけの

出ありし。此年頃一夜ともあり得もの一人も。  
御僧もぞく速出するん。夜半の頃人ともうか  
あむらふ。アはふ念佛一居まふのうださよ。今朝  
もくやとせわれど。ほがなうおとるたふとらよ。いふ  
らききし侍らぶと。師もくはし語られど。  
あふたふしとげりたあひ。誰くもあしと呼あつ。のふ  
つり尋ふ。財寶とぐと得し。も急し其  
堂舎と修造し。の亡僧をも。あもづらふつらふ。  
りく法施せられん。人皆真佛のぞく帰敬渴仰し。



專修念佛そのもの多うしほふ。その所々ものづれいで。  
信州上州へ入り滞り修行。説法度生も倦  
くたり。つる所々現験のことも多うりき。

年経く後。帰国せしに。道俗よりむかひ集りて。枯折  
のしをいりて。やがて出られり。そのら年経  
て。弟子とも相議し。師の住するべし。きづかる所  
をえむ。へふも。たづみ出。きり奉らん。て。や  
庵室をつくる。けり。けり。誰か迎へ参らる。へして  
尋奉る。いり。即山といふ。教心者。下ふ。志

深きものをりたる。我尋やうせん。て。笈らうけり。出に  
る。と。うら。び。と。う。修行者を。いづこと。と  
や。たづ。め。即山が心のうら。けり。なふと。と。と。  
ら。秋津洲。あ。五。幾。七。道。ふ。過。誠。乃  
心を。先。五。幾。内。と。尋。奈良の都。平の京。う。か  
ら。遠く。東の。武。藏。上。総。下。総。の。行。も。う。師。と。た。づ。み。方。も。な







居る。奉事侍らんとす。折る冬のしをなれども。よく  
 寒き信濃路の雪踏分りありき。即山が足  
 くれつと。さるる。さるる。さるる。師にれと。我も  
 若多れ。汝の老る身なり。此寒國に。凌る。凌る。  
 う。師の御房  
 の。御住居のありき。又同行の者どもに何と。何と。  
 尋出。尋出。更にな。更にな。感。  
 師も。師も。

わく。わく。相伴。帰國。即山が。即山が。  
 類。類。此所。此所。嘆も。嘆も。  
 紀國。紀國。即山が。即山が。  
 歸。歸。逢奉。逢奉。聞入。聞入。獨。獨。  
 即山。即山。伴。伴。歸國。歸國。庵室。庵室。  
 心庵。心庵。名。名。自行。自行。他。他。常時。常時。  
 萬遍。萬遍。禮拜。禮拜。或。或。二百。二百。三百。三百。禮。禮。隨。隨。時。時。不。不。定。定。夜。夜。更。更。







長三郎傳下が事狀トダテをよと。つよふひ出いし。自他トモの信心えいとくけしまれる。ひく道心どうしんの色雲いろぐもとあし。歡えん喜きれ涙雨なみだりとくして。勸誡くゑんでしゆゆ。ゆるさるふふ。説法せっぽうとくさるも。たらしまらら發心はつしんし。おもひは師しとええ。つも。ひく念佛ねんぶつと。日課にっか誓受せうじゆの人ひとつる所ところで。これ數多おほくりきも。師し此庵このいんふの住すまも。なにか心こゝろをぬぬ。つりつりししみや。晩年ばんねん和州わしゅう粉原こなはらの極樂寺ごくらくじを兼住けんじゆする。夏なつは粉原こなはらに安居あんごし。冬ふゆは至心庵ししんいんに歸かへり。修行しゆぎやうでしゆり。まゝに忍土にんどの報はつつた。往むかり

生なまの時ときつゆみや。寛政二戌歳えんせいじゆしゆざい八月中はちげつちゆう頃ころ病やまひふととううりりふ。つづつ起たげるととりりく。弟子等でしらに向むかひ。我われ往生じゆしやうの素懷そくわいををべべし。汝等なんぢらくく心得こころえと看侍けんざいととつつて。それより病床びやうだうにつつれれるるふ。歸依きゐののれれとともも多く集あつままるる。名殘なごりをととくくるるもも。たたづづつつつつつつ助すけ音ねととべべしし。つづつつづつ不斷ふたふた念佛ねんぶつででしし。十月十四日じゆげつじゆしちにち朝あさ五ご時じ弟子でし某あるふ告つぐ。往生じゆしやうらくらく覺おぼゆゆ。油斷あぶらととべべしし。ららどど。ららづづ。我われと汝なんぢと聲こゑををううけけ合あははしし。念佛ねんぶつととべべしし。始行ししやうででしし。れれるるふふ。その勇猛ゆうまうををしし平生へいぜいふ過あやまとと



了。ひつ下のらふつるまじ。らふもくた。助音に  
 窮屈もれども。師ひり強盛なり。なふらふもつは  
 かりたり。翌十五日。殊さう弱られうぞ。稱名さうふ  
 念ふ。朝より聲々念々次第に微音に聞えたる  
 が。八時のころ。其聲止む。禪定に入がてく遷化せし  
 ころ。時齡七十三歳。法臈をこぞりたり。嗚呼苦界  
 の船師。愛河の橋梁。をぐ没も。傷歎ありりらるる。  
 ともく師一世の自行。堅固精密。化他勇猛至誠  
 ありらるべ。その教化ふらる。いそぐ往生するもの

數多し。その中五三と此書にあら。此外に即隨  
 和尚。即攸法子。見生法子。知真法尼。俗名平井友  
 右衛門等。皆ともに堅固不退の行者。して臨終  
 正念あり。稱名の聲をこぞり終る事蹟一条あり。  
 具にあらるふらるる。光明大師曰。若得一人捨  
 苦出生死者。是名真報佛恩。乃至今時有緣相勸  
 誓生浄土者。即稱諸佛本願意也。今此師の行  
 操。祖訓ふらるる。とわらふ。いそぐやる。  
 らるる。此師の行化。人蒙るる。ふらるる。異類



不及<sup>及</sup>多<sup>多</sup>。其中一奇事<sup>奇事</sup>と云ふあり。師<sup>師</sup>より西<sup>西</sup>  
 要寺<sup>要寺</sup>ふありしころ。づこころ一つの猫<sup>猫</sup>きりしはひふ上人<sup>上人</sup>  
 ののざらしく侍<sup>侍</sup>り。時々鼠<sup>鼠</sup>を取<sup>取</sup>りてくひをたす。りま  
 夜師<sup>夜師</sup>んとこそ。悲心<sup>悲心</sup>骨髓<sup>骨髓</sup>ふ徹<sup>徹</sup>し教誡<sup>教誡</sup>してゆく。汝世々<sup>汝世々</sup>  
 の痴業<sup>痴業</sup>あり。生々畜身<sup>生々畜身</sup>を得<sup>得</sup>ず。三塗<sup>三塗</sup>とのが事<sup>事</sup>を  
 得<sup>得</sup>ば。今生<sup>今生</sup>よりかく殺業<sup>殺業</sup>とす。の<sup>の</sup>。未来<sup>未来</sup>永劫<sup>永劫</sup>悪<sup>悪</sup>  
 道<sup>道</sup>とぞ。び。今より害心<sup>害心</sup>と制<sup>制</sup>しむ。後生<sup>後生</sup>必善果<sup>必善果</sup>  
 を得<sup>得</sup>べし。若<sup>若</sup>此<sup>此</sup>ふもむらば。づらも出<sup>出</sup>らるべし。て。  
 十念<sup>十念</sup>とまづけしむ。其後<sup>其後</sup>の猫<sup>猫</sup>と鼠<sup>鼠</sup>とささる

のころ。をぐく微妙<sup>微妙</sup>の虫<sup>虫</sup>といふもくくはらり。旧<sup>旧</sup>を  
 経<sup>経</sup>る後<sup>後</sup>。ある夜<sup>夜</sup>も。常<sup>常</sup>りも殊<sup>殊</sup>に大<sup>大</sup>なる鼠<sup>鼠</sup>とあり。ねが。  
 師<sup>師</sup>んとこそ。もふ畜生<sup>畜生</sup>こそ是非<sup>是非</sup>なれぬ。らうこ  
 ろ深く誡<sup>誡</sup>り置<sup>置</sup>し。ものをとす。又<sup>又</sup>もづらふ教誡<sup>教誡</sup>で。  
 十念<sup>十念</sup>と擲<sup>擲</sup>らる。その夜<sup>夜</sup>夢現<sup>夢現</sup>もこそ。猫<sup>猫</sup>人語<sup>人語</sup>とあり。  
 又<sup>又</sup>過<sup>過</sup>し頃<sup>頃</sup>あり。御<sup>御</sup>教化<sup>教化</sup>をひらけし後<sup>後</sup>。畏<sup>畏</sup>りて  
 殺生<sup>殺生</sup>をそより侍<sup>侍</sup>りに。やむいり。一<sup>一</sup>年<sup>年</sup>経<sup>経</sup>るころ。  
 鼠<sup>鼠</sup>みり。あまの佛具<sup>佛具</sup>をく損<sup>損</sup>じ侍<sup>侍</sup>り。佛<sup>佛</sup>敵<sup>敵</sup>法<sup>法</sup>  
 敵<sup>敵</sup>し思<sup>思</sup>ひ。ころ。給<sup>給</sup>し。陀<sup>陀</sup>多<sup>多</sup>ねが。師<sup>師</sup>



も希異に思われざる。其のらわの猫。つづこへうせふなり。  
 ろふ夜夢中にあつた。師の法益ふより。  
 今は畜趣を脱り。人間に生じたり。ももふ師  
 の慈愍ふも。その思報い奉るもはじごと。らと  
 見ふ多し。ならし人の姿とありしと思ふ覺ふなり。  
 師はく奇怪に思われざる。いよと言葉に出さ  
 ざりし。親近する一男ありし。此頃猫のそえ  
 ざりし。師はれ何れ知らずやと。たふ

男前夜夢中ふあつて告侍とつ。その夢師と也  
 もたがふ。なりきれば。實夢なり。ももびのり  
 なまひあり。諸天人人民孺動之類。皆蒙慈恩解脱憂  
 苦と説く。つづたふれ。師の至誠  
 の慈悲心と。光明名號の照益と。うらなむ比類  
 かなたふれ。人皆信心とせしなり。  
 又奇話あり。師晩年の頃。ある日攝心念佛せられ  
 ふ。一狂僧来り。師道德ありて。我に何のうり  
 たる。いであつて。師とあふ。



のくろくろの爐中の。大なる炭火とともども頭上へのせ  
 かりたれども。師もくも驚くも。なやんらうふ念佛  
 て居らゆと。えつけゆる人。あつて狂僧とやつけり。  
 火とよりせしうも。それ跡やけられぬ。数日ほど  
 そかり。なだそりまゝ給ひたり。師打笑らゆ。  
 捨るなりし身を。あつて何程のそらん。  
 うみの地獄の苦を思念し。厭飲とせんたりをい  
 らむ。まごふれが心とあり。そのまごふあり。そり  
 らる。其のそも慈悲とくへ。の狂僧と護る。いつく

一予給ひるそらん。師の法入安住する人  
 のつて。なふそり侍る。此傳をかくるれども。  
 世のそり大に益あるべし。ゆま。つづふそり。繁文  
 とつて。まごり。自行化他の策鞭と  
 らん。

即山法子

法子の和歌山東長町。岡寄屋十右衛門とつて。商  
 人なり。そり性弊悪う。家の業もあつて。兵術  
 とつて。そり不敵者なり。造悪う。



盛なり。とらるにあり。時。即厭上人の説法とて。宿善開發のとき。骨髄入。徹し。尊く覺。これ。忽改悔發心。專修念佛の門入。終に。四十九の。萬勞と放下。剃髮深衣の身。日課念佛三萬唱。日別四時勤行。專心不退の行者。ありき。とらら上人に親近給仕。毎時聽法。あり。子息の家の後に小庵とて。閑居念佛。とらる。寶曆十二年。十月の中頃。

微疾あり。上人の庵室入。弟子此度の病。必定必死。思ひ侍。年來の御教化。み。安定往生。侍。暇として。歸。念佛。勇猛。同月廿九日晨朝の勤行。常。懺悔。發願。念佛。胸。蒲團。念佛。家内。醫師。醫者も何も無用。念佛。



手巾ととりて。額の汗とちぢひ。惜し断末磨  
 合掌。極重  
 惡人助給へ南無阿彌陀佛くと。十聲をうりま  
 息絶ふる。壽五十九歳なり。此即山の上人に  
 歸依する。他ふ異うて。諸國とよひりたり逢じ  
 深く侍り  
 上人もふりたり深く侍り  
 感給ひたりせん。其  
 戒名ハ。本譽如願即山法子と號と  
 竊に世尊のそくをみしに。恩とてんこ

知るのそ。わづらうとけらうと百千里なり。も  
 恒に歎譽と  
 恩とてんこ  
 實に即山う師と敬慕  
 佛ふらうづ人  
 抑父母生育の恩はくを報じ  
 生死の家と出んと  
 佛門入。中うも超世の本願入逢たくなり。















ころみれど。其身をとり。二子かたふなるといふ  
 つぎきり。身とまじりて子供もさるもさる助  
 かんむりやふ。けつてやけり。けつてはつてさるもさる  
 六十余州とつり。靈佛靈社とや拜とま。西國  
 四國と廻とま。神社佛閣とや禮とま。子と思道  
 より迷ひ出なるとま。心のしらあられも便をま。と  
 くつてつてつてつて。心の闇のまどぎれ。近くおつらん。紀  
 三井寺。觀世音の靈驗あり。にかりませ。おつらん  
 詣て。佛の御らつにまを奉とま。七日の間

物をさるつてつて。彼堂にうら籠とま。あれ大悲  
 の恵とま親子四人が後生助とま道と示と給  
 つてのりつて。夢うつまを。大悲の薩埵ありつて  
 つてつて。西國四國殺父坂東も。六十余州回国順  
 禮も無用とま。近とまは汝がわらひ所西要寺に  
 千座の說法あり。怠とま詣て後生助とま  
 と。あきつりに告とま。夫婦をあらまは。今更  
 ありつてつて。西要寺ありつて。つてつて。千  
 座の說法と始めたまは。尋とま。即厭上人驚と



ぶらり。さういふ誰うのきし。そのくせをいふやうな  
 心こころに思おもうやうき。やういふ人ひとは洩あはれやう。のま  
 べ。ありし御告みつげのま。けづきにくりきえきね。上人じゆんじんき  
 もらふ。うとらなをな。愚おろかる我志わしし。観世くわんぜ  
 音ねの。ぞ知見ちけんし。くろくろり。びら。感喜かんきでし。け  
 した。二人ふたりもさ大悲だいひの御告みつげし。うら。と感かん  
 ぐ。涙なみだに袖そでとひ。り。上人じゆんじんさ。延引えんいんし。きふ。あ  
 じ。や。千座せんざの開闢くわいひくあり。夫婦ふうふ日々  
 参まゐる詣よで。聽聞ちやうもんし。う。受定うじやう往生じやうじやうの道みちあり。

因果報應いんぐわくばうおんの。つ。り。も。く。た。や。く。ん。厭えん欣きん  
 至切しきつう。專修念佛せんじゆ念佛の行者ぎやうとなり。二人ふたりも上人じゆんじんと  
 拜をし。剃髮しはつ深衣しんい。報雲法ばううんぽう子こ。智榮法ちえいぽう尼にと名なづ  
 け。後のち。口稱くちゆ三昧さんまい。行住座卧ぎやうじゆざわ。念々ねんねん不捨ふしや。勇猛相ゆうまうさう  
 續つづく。運心うんしん年久ねんきうく。宿業頓しゆくごうとんに滅盡めつじやうす。や。時々ときとき  
 好相こうさう感見かんけんを。く。と。ひ。う。ふ。同行どうぎやうの。い。も。語ご  
 たり。つて。夫おつの法ぽう子この安永あんえい十丑じゆしゆ歳さい。後のちの五月ごご  
 念ねん佛ぶつと。も。ふ。終しゆる。ふ。ける。妻つよの尼にの天明てんめい六午りくご



歳の九月十四日、いんも臨終正念しんねんあり。あまのこゝろ  
 終しんつとそりゆるとぞ。嗚呼あゝ佛種ぶつしゆへ縁えんあり生なまれ。此  
 兩人ふたりにん愛別離あいべつり苦くと縁えんありて。歸佛きぶつ入道にんどうあり。あまのこ  
 ゑふ地ちにありて倒たふるものれ。地ちにありてあまの謂い  
 たること。あまの上人じやうじんの行化ぎやうけ。大士だいしの悲心ひしんふるふ。薩  
 埵さつだの利生りじやう。行者ぎやうじやの信心しんしんに應おむる。あまのこ  
 ゑ侍まじる。あまのこ二子ふたごの靈たまも。得脱とくだつ速すみくあまのこ  
 づゝのこゝろ

淨譽知圓禪尼

禪尼俗名ざんにきく。和哥山わがやまの人。小倉こくら專せん之の右衛門ゑもんが妻さい  
 あり。その家代々いへよ篤信あつしんありて。三寶さんぼうと崇重そうじゆう。善根ぜんこん  
 と積植つみしきありて。專せん之の右衛門ゑもん夫婦ふうふいよほど盛年せいねんなりと  
 ころも。即厭すなは上人じやうじんの化導けがうに歸かへり厭穢えんじ欣淨しんじやうの心こころ  
 あり。一向いっけう專修せんじゆうの行ぎやうも勤しんなり。きく。日課にっか念ねん  
 佛ぶつ三萬聲さんまんしやう。いよほど曾そう々そう怠たいりたり。然しかるふ寶曆十  
 二年じやうに歳の秋あき。七月しちがつ痢疾りじやくと病びやうくる。あまのこ産後さんごの惱なご  
 あり。あまのこ必死ひつし決定けつじやう。あまのこ迎接いげつをいよほどあまの  
 至切しきつあり。あまのこ看病けんびやうのあまのこ。我命終われいのしゆうの時ときあまのこ親おや



一くちぎりのあまなる。同行誰々に告せしむるに  
 ぶが。同月廿四日。往生の時。今なり。早くみん  
 を呼来ぶ。急を呼集り。同行誓因  
 尼傳下等来。家族も佛前に集會。香華  
 燈明と辨備。異口同音に念佛と。きく又手合  
 掌。懺悔の文と誦。高聲念佛。その聲勇猛  
 平生ふ異な。漸々微音ふなり。眠るがこ  
 息。容顔笑るが。歡喜の相なり。其  
 年三十九歳。見聞の。

湛光了然信士

信士俗名常次。和歌山の湊に。松村文右衛門と  
 又者の子なり。それ性柔和。孝心厚なり。父母  
 父母のりなり。そのりの人皆と愛し。り。  
 六に十六の。二月の。重を。父  
 母の唯その病と憂ふ。を驚ら。や  
 り。此なり。名なる醫師と。の。療  
 治。更に。の。遠き。の  
 多くの醫師と。か。功。して。



日ふそい月ふ隨り。顔色衰へ。形容枯ろの。春過  
 夏よりて。秋風ふそいしむを。病疲して。七月五  
 日六日のころより。ひそひそふ打臥也。七日の朝西親  
 へひつゝて。我身此五日まで。今一度本復も  
 ぐく思ひしが。まゝいふぐくやまらうとわつら。氣  
 貴と僧一人あつれふも。ぬもころふまのざり  
 づるいしが。覺てのら。その譯うそ覺え侍ら。ど  
 た何とふくこの世のころ。極樂の依りた心發  
 ころ。あそんそく往生せむと思ひ侍ら。それと是ま

であらうと念佛もまゝと。まゝとまゝと折つた。汝  
 臭蜻蛉の類と。多く殺しつれ。不身う。往  
 生う。びつて。彼西親の淨業の信者なり。  
 中うも父丈右衛門の十二歳う。同時ふ西親  
 に離れ。志し發。即厭上人ふ隨ら。日課誓  
 受。公私の繁勞念々の中うも。閑と偷念  
 佛とらう。浄土の安心なり。て安定。一  
 念十念。念う。安定往生。て。汝とぼり



五言二句  
心多事向  
人老  
如云



の罪つとのつじかれば念佛ぶつぼんぶふまふなげ。往生ぶつじやう何なにを疑うたが  
 けんをと。つふふものうりたれを常次じやうじふを聞きて。大おほに喜よろこ  
 び。忽たちまち信心しんじん安定あんじやう。口稱念佛相續くつじやうぶつぜんぞくなり八日はつじつ來迎らいげうの  
 繪像えいざうと拜見はいけん。るるふふんとふゆと丈ぢやう右衛門ゑもんあり  
 ちとそを聞きしらんべ。領納りやうなつ。つよく念佛ぶつぼん怠おこ  
 す。此日このひを湯藥ゆやくをとりまりたれば。りりくりく  
 心得こころえするものあり。今いまも往生ぶつじやうとの待身まちみに。い  
 ちとものとしてあり。くして御身ごみの安心あんじんへいおん  
 とやうん。らふあぶをともといくる。それ一心いっしんふ死しと

待まちるらるら。大おほ概がいくのぶじ。九日くじつ。我われが病びやうりつゆ急いそ。兩りやう  
 親おんの御心ごしんとつとまりま。たは女によの御恩ごおんも報むかひ奉ほう  
 らる。先立まゐらるるら。不孝ふけうのつりなもと。父ちちを  
 ぐりらるら。つふとよ世中よなかみれ。妻つまをむこ子こ多く設しや  
 けをと。後のちに。親おんより先立まゐらるるらるら。そ  
 してふふとまりま。この心こころげひをといふ。大おほに悦よろこび。  
 往生ぶつじやうの後のち。御恩ごおんの報むかひ奉ほうらん。父母ふぼ御ご往生ぶつじやう  
 の時とき。諸しよの聖衆しやうじゆうに先まづらて。迎むかへらるら。見みるらと  
 せらるら。それ孝けう心しんのうらたけ推おしるるら。病中びやうちゆう瘡さ







ありけん。先の大なる御佛此時に來迎し、さるる  
 合掌の手と額ふりて。次第くに胸回ふ下し  
 くれむ。そのまゝ息絶にたり。半眼微笑みて。その合  
 掌翌日やぐらゝんどもありける。安永四未歳七月  
 十五日行歳十六歳なり  
 支哉心年久しく。行業日厚と。八旬の老翁も  
 けを不得たるに臨終の正念なり。つゆ信  
 不淳信心不二信心不相續故うく侍る。然に  
 發心日淺く。行業幾くならば。二ハの女年い

往生の法。法藏菩薩のしるしに國王と  
 國の民も。父が教導。あふる女縁の  
 今や。我聞父母の恩ハ七生。師僧ハ無量劫  
 と。今の父母ハ無量劫の恩を。併  
 是本願大悲の威力。名號難思の利益。執持名  
 號一日七日佛與聖衆現在其前。心不顛倒即  
 得往生。誠實言と信せしん  
 壽光信女  
 信女俗名ハ。千代。和歌山の人なり。三十三歳



夫ふもふれ。世中うらさきく覺えうた。即厭上人  
 れいふ叅して。日課念佛と誓受せり。らうたこ  
 光明院とて。觀世音あり。千代。此寺に日叅  
 して。至心念佛一極樂に生れんことを祈る。風雨  
 とて。霜雪とぬく。十八年一日も怠らば。  
 のこす。大悲冥加の方便。至誠信敬の明驗ふ  
 やありけん。此女の乳とのけし。諸の病瘡しと  
 感得せり。近隣よのあり。知る所あり。實に不思  
 議の感應なり。其後信心彌増。日課念佛勇進

一日叅もやと怠らば。寛政四子歳八月十日あ  
 かり。少く氣力あつて平卧せり。一日夢  
 現の別をく。甘露の法味とあり。八葉の蓮華に  
 座とて。看病の人に語る。いつて九月六日。正念ふ  
 命終と。時に九十歳。壽光信女と號と。その日叅  
 のも。今年まで。都て五十八年。一日も怠  
 らざりしと。なん。ねも。日課念佛もやと怠らば  
 一と。光譽妙仙法尼







くもくも。餘言なく念佛も。駒のりくく未のらも  
あひくくくくくく。さるの剋ふくく。くく高聲ふくくく  
終る南無くくく聲のくくく。くくくくく息く  
まりぬ。行年七十三。くく待死如愛客。去如至大會  
と。此法尼のくくくくく

一道貞心信女 其夫

信女俗名。くく。和哥山。高芝伊右衛門の妻なり。  
生國備後にくく。始に泉州田川の遊女なりき。  
くく容うくくく。伊右衛門ふく思ひくく行通

くく。終に迎て妻とせり。生得心くく。くくをらへやふ  
くく。世の常なるくく。姿なぐく露なぐりく。くく  
ら佛のくく。疎くく。即厭上人とくく。帰敬く。其  
教化とく。日課念佛と誓ふ。後古郷の老母を  
訪ふくく。宮嶋の学信上人と拜く。日課二萬  
稱と増加く。三万づくく。日方浦拙蓮尼の  
往生記。くく。信心とく。平生物見  
遊真の暇と支に願ひく。其代く。説法聴聞。  
法要の結縁もく。泰くる。毎朝未明に起居て念







衆らさん。これとふくたのき。安定此度極樂に生ん  
 とみり。もてさうほけり。本願とたのき。御念佛  
 候へ。佛の平生願ひぬものゆゑ。俄に頼むとも  
 助くまぶさのさるつ。必引接し。まぶさ。まぶさ  
 別し。似し。まぶさ。まぶさ。世の中。ヤグ跡よ  
 往生して。蓮に逢ふ。まぶさ。まぶさ。跡よ  
 を心の。たまひ。まぶさ。涙とまぶさ。心はま  
 げふ。まぶさ。まぶさ。夫も安心安定。病とまぶさ。念  
 佛。まぶさ。即厭上人と請ふ。信終正念。まぶさ。同

廿八日往生。嗚呼民女。うた河竹のなぐれの  
 昔は。知とまぶさ。枝とまぶさ。深く契。まぶさ。夢さ  
 め。夫が。信命終の。今際。まぶさ。真の善知識。まぶさ  
 速出生死。往生浄土の道に。まぶさ。宿縁  
 とまぶさ。まぶさ。侍る。まぶさ。民者病の。まぶさ  
 夫の傍。まぶさ。夢に。自身。まぶさ。命終。まぶさ  
 まぶさ。まぶさ。聖衆来迎。まぶさ。まぶさ。まぶさ  
 たり。終に引接。まぶさ。佛の後。まぶさ。西と  
 り。まぶさ。まぶさ。まぶさ。まぶさ。まぶさ。まぶさ



うりも心を心の内に廁のどく。むらけけづりく思  
 られて。まゝり念佛しるゆえ。傍の人驚うくる。お  
 き居く尚高聲に念佛せらる。人皆らうと思ひきた。  
 後に同行の尼ふ語る。つて夫命終つらへ。て  
 厭飲の心深く。専修の勤しむる。とてた聲  
 にく。高聲ふ念佛とと。まゝ人感涙ととぎあり。  
 三十二歳の秋の末。痢疾と愁へ。終焉のらうと  
 りり。露も命と惜む風情なく。勵聲念佛して  
 往生と待たり。一僧來り。快氣ととと佛神に

祈願しるふぶりを聞か。あれらと。念佛  
 し佛の來迎とまり身ごとよ。限ある命。今更  
 祈る。何のせん貴僧の中々往生の障をり  
 と。次の間ふ追出たり。此折しも。備後なる老  
 母西國順禮し來り。滞留しあり。ふひう  
 らう。海山隔て命終き。うとみもおん。  
 最後のうも。うとみ。うとみ。うとみ。うとみ。  
 へふ心うく思。うとみ。折。うとみ。うとみ。  
 互に残り。うとみ。うとみ。うとみ。うとみ。



跡より往生したる。蓮のたぐはとて待奉る  
 びたむ。おもむくふらきこえたる。老母我子の  
 けがら諫に伏し。涙とのんで念佛したり。九月三日  
 空を指さし。今日へ往生す。晴やふくまら  
 喜び。親類何れ出入のまをふ跡のく悉く頼  
 我のほごく極樂ふ衆ふ。同音に念佛し給と  
 高聲念佛と。病の纒ふ三日。心いたり。今  
 念佛の聲つふ。今日往生す。くへん。今日  
 日中につき。あり。往生す。遠く侍る。闕

給て。佛前より。今  
 日往生の闕をり。喜び勇む。頭北面西して  
 念佛と。八時より。高聲念佛せり。顔口  
 笑ふ似く。日頃より。時寛政二戌歳  
 九月三日をり。その齡三十二歳。抑真心平生よ  
 々。卓然として。事状誰の人。感でせん。  
 殊に夫の臨末に念佛と。若き女人  
 の。終焉の日と。



正念に念佛しんねんも平生眞實修行へいぜいしんじつしゆぎやうの所為ゆゑなり。化佛菩薩尋聲到仰けがらふぼさつじんしやうしやうと拜をがむし。一念傾心しんねんしやうしん入寶蓮にりやうれん。とつら寶池ひやうちに生なまらん。更に何の疑うたがひあり。言ことと有信うしんの人ひとなり。芭蕉ばしやうの幻軀まぼろしのこゝろ久ひさし。蓮華れんげの淨土じやうと頼たのみ。賢けんきとて思おもひ。なづら駒こまに鞭むちとらて。法の燈とうきえり。西さい路ろみむまぎとや

はくくおし。あつらうきたるふねのりそ  
う。宿世しゆくせのしんしん身みふふくくくく。のりうたの

つりく。のりくも。弘誓くわいしの寶船ひやうせんふふのりく。輪回りんかい  
生死しんじの古里ふるりと出でくくらん。つりく。心こゝろ操さうかかげげや。嗚呼あゝ實じつに信しん女にょ。一いつ道だう眞しん心しん虚きよ名な  
みわくみわく。實德じつとくと標ひょうとてとて。

誓因法尼

法尼ほふに。和哥山わがさん湊みなの久ひさ右衛門町えもんぢやう。玉置源たまぎげん右衛門えもん  
の母ははなり。知識ちしきふふくく。本願ほんげん  
の道みちとき。專修せんじゆの門かどふ入いり。運心うんしん年久ねんきうく。  
行業げんぎやう功こうなり。同所どうじよ西岸さいがん寺てらりて。祖々そそ相承さうじやうの安やす心しん







一面に慶雲と云いぬり。その色衆色うく。たゞ  
 孔雀の羽のうらふ雲のあつくと思へば。金色の如来。同ト  
 うが三昧。出現し。たうと云いぬり。う  
 と奉り。りて思へら。繪像木像を夢に拜し。う  
 かり。生身の佛を拜し。未曾有の  
 生も必疑ふべし。是やか念佛と云いぬ。五障三從の女も。定往  
 生も。歸らんと思へら。今も佛のうれさ  
 する。本意なり。進退あり。たゞ。佛  
 かくれ給へ。念を。家に歸り。合  
 して。誓因我も拜し。その  
 九月四日の夜丑の中剋嫁女にのり  
 今此庵の西の方より。五人のがらう來現し。  
 我枕上に立をびる。御長四尺むうり。それ

御姿肉色うく。浄らふ。瓔珞をの莊嚴し。奇麗  
 なり。我地藏尊とて。拜し。感  
 うれあべ。づんのがらうあり。感  
 喜念佛なり。同七日ある僧來し。十念と授て  
 のうらのは。法尼此と云いぬ。嫁  
 のうら。四日の夜丑と云いぬ。一  
 法尼のうら。五日の晝に。白晝  
 室内明り。と云いぬ。實やがらうの光明うく。白晝  
 と思ひぬるを。八日夜宵よ



知識の僧と同行の尼衆來りて念佛も丑の  
 剋々苦痛なり。念佛も手とり合掌  
 四五度。傍人氣息に  
 合々念佛。高聲勇猛に  
 二三十邊次第に微音になり。一千邊餘と  
 正念命終と。壽七十二歳なり

靈賢居士

居士。和歌山の人。俗名斯波右衛門作法名と  
 瑞性院猶譽即阿靈賢居士と號す。つて即厭上

人の化風。隨ひ。日課念佛五千遍。年來怠り  
 寛政十二申歳の四月廿日頃。持病つ  
 必死の覚悟。至誠念佛  
 廿四日。平日  
 心。出仕。娑婆の出仕  
 御國阿彌陀法王の御前に出仕  
 念佛。廿五日夜。夢中に異僧  
 三人來現。拜。覺て後妻に  
 歡喜。高聲念佛勇猛相續して廿六日の曉



稱名の聲も息絶ぬ壽齡五十有六なり。

長三郎

海士郡鹽津浦に長三郎といふ漢人あり。天性篤實うて。父母に孝養の心ふく。人ふたつて露もあつて入らな。父母身やうて後。無常のありさぬ心にさむくと。後の世もそと恐ろしくおぼえなれど。そふもさう中うて。朝ふ夕なる念佛念ふにげりた。そのらゆへ煩ひたり。やがて快復す。氣力つくやうなれど。弟彦三郎あるもの

にひらぬ。我今より漢の業とてむくおぼし。朝夕とてさむ。其許の力うけはらぬ。そふもさう喜びつ。いふも違へそやうと受ふ。よりいふも喜び常に家ふりて網ととら。そふ命と支ふるんがせり。いふも貧し。中に妻子とけむい。そふ輪回のきまふなり。心づくるもや。年頃むつふ日を送りぬ。ある時當所極樂寺の和尚。かれ家の前と通らふ。長三郎高らふ。謡う。網







みるゝとて。浄土に神遊し。種々の莊嚴と拜と奉  
 つふ。金玉と彫るる大なる樓門あり。左右に玉  
 垣と仕廻し。見渡す所千里あり。も有るん  
 覺也。門前ふりまれば。おのゝ手に金色の花  
 と持てる。へるる花を問ふ。是は娑婆  
 うく佛に奉つるものなり。志し誠あり。微妙  
 の淨華となりぬ。今教主阿彌陀佛に奉るなり  
 と。よと傍に寶網あり。懸る。その目毎に南  
 無うと佛の六字金色にあり。曜々たるものや

有り。不思議と思ひ問奉る。是を汝う年頃手  
 業にて。網をり。稱名を結ぶ。浄土  
 の莊嚴とあり。案に長三郎が手業に  
 打任の莊嚴と三途の苦報と。網をり。結ぶ。浄土  
 身衣食の資を露も殺生もろろ。身命と  
 をり。えんが爲うて。露も殺生もろろ。身命と  
 異類の助業。結ぶ。細の浄土と莊嚴の心に住し。念  
 念佛し。是は威儀なり。佛前ふ其相直に。誦經念  
 清淨。威儀。佛前ふ其相直に。誦經念  
 佛。影現。當來の苦境と。僧の名利の縁。佛  
 説。影現。當來の苦境と。僧の名利の縁。佛  
 説。影現。當來の苦境と。僧の名利の縁。佛







勝境を拜とていふ事とて。却て長三郎病に心もな  
 かるる事とて耳語。いふたことして静に往生と  
 待まていけ。あつた何とていふ事とて。諸人  
 疑ひの事とていふ事。此微妙の莊嚴と拜とていふ事  
 べし。いふ事とて念佛とていふ事。信てぬ人といふ語と  
 ても詮なり。我往生に決定なり。臨終と思ひ合は  
 べし。いふ事。そのいふ念佛の外他事をいふ事。同二十七日  
 弟彦三郎といふ事。我明日往生とていふ事。いふ事あり  
 くのいふ事。六月朔日申の上刻に来迎あるべし。

佛の御告なり。親類ともいふ寄置べし。弟是  
 ときをいふ事。外聞と憚りて。漸く朔日の朝親類  
 に告なり。其日家の空ふり。紫雲夥敷棚引  
 近も里の人といふ事。鹽津より和歌浦ふ  
 渡海の人といふ事。いふ事。いふ事。奇異にいふ事。  
 果し。申上尅ふり。端坐合掌。身心安祥あり  
 高聲念佛數百遍。終つて右れ手とり。南無と  
 唱る聲の事。いふ事。眠る事。息をいふ事。延享四卯  
 歳六月朔日。閱世四十三歳なり。翌二日西の山にて



茶毘と。三日遺骨と拾ふ。灰と五色と。白骨に  
 五色の舍利つきて。その數と一と。船の形に  
 白骨に青黄赤紫色種々うらうら華紋あり。彦三  
 郎より諸人まで。病中の物ざり。臨終のときまで。思  
 ひ合せて感とあり。の舍利と家に持てり。佛  
 前に置し。光彩日増し。くもなき。と聞て遠  
 近より來り。結縁する人あり。つりつりつり  
 經曰善知識の菩提の全因縁と。長三郎とぞ  
 和尚の教ふをりせ。たをく念佛者より

念々不捨の人あり。つて。現身ふ業成  
 見佛し。上品往生の記別を得ん。昇沈雲泥を  
 是。凡事より慎む。それ感見の勝境と思  
 ふに。目と閉目と開くに。浄土の莊嚴歴々と  
 眼前ふあり。定て知る口稱三昧と  
 發得てるなり。光明大師曰。佛の三力外ふ加  
 へ。無智の在家なり。行と一は散心の口稱  
 ふ過も。佛力に。此巨益に



あづうらん。任聲三昧市中道場と。稱名の一行  
真に妙なりや

うゝ女

日高郡森岡村。喜平治の妻。うゝ。ついで徳本行者に  
歸して念佛怠らん。寛政七卯歳病あり。臨末に起  
る。坐して念佛了る。數十遍向  
と。完爾。眠り。息絶。容顔生るが  
。四月廿七日。年三十有七。同年六月。喜平治  
病ふ。一夜夢。亡妻来。病ふ。

娑婆に居るらん。極樂に御出候へ。ま  
。我も思ふ。心に。先極樂と  
。せ。夫。唯  
我に随ひ来。西。夫。後  
に。倏然。廣大寛平の所。地  
上白砂を敷。宛も雪。の奇廉さ。是  
。何と。貴く。念佛。行ふ。是  
と拜。植木。左右に  
立並。此方。植に似。梢。枝



毎に水晶の瓔珞（おうかく）のりて。玲瓏（れいろう）のりて。アケルも。まてすも  
 ゆくみ。づこも。な。異香薰（いしやうくわん）。く。馥郁（ふよく）。より。廣大（くわんだい）なる宮  
 殿あり。それ大なるみや。喻（よ）ふものなり。莊嚴（しやうげん）きいなり。う  
 り。階（かゐ）より昇（のぼ）ふ。殿内（だんない）壁（かべ）なり。又柱（はしら）なり。廣（ひろ）きく目  
 も及びん。中央（ちゆうしやう）とこれなり。佛坐（ぶつざ）し。御身（ごみ）のり。一  
 薄（うす）く。く。光明（くわうみやう）ハ赫（く）夾（くわ）なり。四方（しやうほう）とて。左（さ）右（みぎ）  
 みの。比丘僧（ひくしやう）數多（すうた）。木蘭色（もくらんしき）の袈裟（けさ）と被著（いぢやう）し。佛（ぶつ）ふ向  
 誓首（せしゆ）し。拜（が）し。五（ご）体（たい）投地（とうぢ）し。拜（が）し。今（いま）に  
 念佛（にぶつ）し。五（ご）体（たい）投地（とうぢ）し。拜（が）し。今（いま）に

く。帰（かへ）し。時（とき）つ。必（かなら）む。迎（むか）へん。く。念（ねん）佛（ぶつ）急（きふ）  
 ころ。く。我家（わがや）に來（き）し。思（おも）ひ。夢（ゆめ）さ。め。寛政  
 八（はち）辰（しん）歳（さい）の冬（ふゆ）。鸞洲（らんしゅう）彼家（か）に。り。喜平治（きへいぢ）此（こ）事（じ）  
 と物語（ものがたり）て。頰（ほ）に落淚（らくるい）せり。欣求（こんぐ）の色（いろ）外（が）に。つれ  
 貴（たか）く。覺（おぼ）え。と。

按（お）じ。喜平治（きへいぢ）亡妻（むしやうさい）の通（と）ふ。乘（の）り。く。浄土（じやうど）  
 に神遊（しんゆう）し。已（お）り。業障（ごうじやう）。真金色（まがねいろ）の相（さう）とら  
 え。黒色（くろしき）の佛身（ぶつみ）と拜（が）し。ん。ん。女（に）  
 が念佛（にぶつ）と策勵（さくれい）し。娑婆（しあは）を。安（やす）愛（あい）迷（めい）



執の枕とをくしも。浄土に相逢てい永く証得  
無生の蓮に託せん。よ何れも。還來しつゝのま  
と導く。喜平治何れも。夢遊しつゝ浄土を拜と。  
ふこゝれ一箇の愚夫愚婦をれも。と眞實に念  
佛せしむ。本願力に乗しつゝ。つるものを。嗚呼奇  
なる。本願。嗚呼妙なる。那名號しつゝ。仰信しつゝ  
常に口實しつゝ。南無阿弥陀佛

岳音上人

上人別に觀蓮社性譽至法と彌と。和哥山西要

寺即厭上人次後の住持なり。壯年れひつゝ。檀林の  
學徒しつゝ。卷舒鑽仰年と積と。論談往復席と重  
ね。高年の後。此寺に住職しつゝ。三業四儀の進修  
と。三心五念の徑路と示しつゝ。解行を備  
と。殊勝の。つる。年古稀ふつゝ。  
老病相侵し。寺務患難なり。弟子をれ。補處  
を。隱居の身と。一向自行と勵と  
け。閑窓無為しつゝ。八徳地に心と澄しつゝ。  
三昧寂靜しつゝ。七寶樹に思ひと運ぶ。誦經の聲



朗かろふひひき。稱なづ名なの音ねとしまくにまり。常にいれるの  
 逆さか悪あくいまど造らば。大おほ善ぜん既すでふ勤り。我引ひ接せふあづ  
 のんんん佛ぶつ願げんをいふと。金こん剛ごうの信しん交こう。此こ言ごん兼けんに  
 ろろろろり。寛政かん五ご丑し歳さいの冬ふゆ。十じゅう月げつのしめのころ。當  
 住すまと呼ぶいれるれ。人世じん不ふ定ぢやうり。憂喜う掌しやうと反  
 このぐどい。い何なんの樂らくり。汝もいや寺務じふとのごと。い  
 今こん世せ後ご世せ身みと安あんでしの。我壯さう年ねんのころり。十  
 八はち日にちに終つひぶしとむいく。ばいにたりしれのどくいふ  
 とろと。來る十八日に往まう生じやうとべとさり。さうらば此こ坊ぼく

空くう虚きょをいれるべし。そのちらふ移うつり専修せん念ねん佛ぶつと  
 べしと。おもいらふ教けう誡じやうと。のこの仰うやめん。へんり證  
 瑞みづり侍りとさげ。さういふるもあらば。がたもら  
 らば答こたへらる。いれば無む下げふらうれ日ひさらふ。御往ご生じやうあ  
 るべし御りな。さういふるえ侍まらばいふ。先まづのいふ  
 ころいれる知しべし。いふらがいふらうり不食ふの氣き  
 ありと。その餘い病びやう苦くをい。医い療りやうと加へるらうりすむ  
 した。上人じやういふ。その若わかきもの生と貪ひる類のい  
 たり。我身わがいれるら所ところの病びやうをいて兼引ひとさりし



弱も。藥ろふ命とのぶべんや。病と愈一多と。  
 強く医を迎ふ。医師来り。脈察とん。我十八日に  
 死ねづく思ふれ。脈のさしほひあはれ。  
 いうる死にらうたふ侍らんとて。上人丈喜まほふ生  
 じ。念佛勇猛なり。十七日。外の外より。  
 病床につも。當夜弟子等集會せり。來迎の繪  
 像と掛しめ。同音に念佛と。中夜みり。皆疲と  
 せん。休息とせ。寝べし。至心に回頭し  
 止らるる。翌十八日未明し。弟子等傍みりて助

音も。上人微音に念佛と。辰の上刻ふり  
 禪定に入らば。安祥して化す。世壽ハ  
 十有三なり。闍維つら遺骨に舍利と。びりたり。  
 あり。終焉と。定り御告のりじか。心  
 深く慎み。語らざりしをん。真修行者の用心  
 のぞり。

心瑞西堂

耀蓮社光譽心瑞。日高郡。切目嶋田村の人あり。  
 幼う。田邊の西方寺大空和尚。不投して。削染



一。後武州三縁山に籍と通す。學憲年積る。宗戒  
 兩脈と稟承と。寛政五丑歳秋より病に侵り  
 九月の末病より重し。同友の僧某尋より一心  
 待死の用心あり。うぶき故實なり。二。病者必死の  
 思ひ安定し。其つら病苦と忍んば念佛し。護持  
 本尊をば。それふ付属し。専ら臨末の用意を  
 せしき。十月四日初夜のころより。隣寮ふあつて臨終  
 正念のころふ。同友五六輩勇猛に念佛し。中夜の  
 頃結願と。其時にあり。病者きりふと歎す

て念佛と看侍の人との故と。あつて。あつて。彼同友  
 病床ふより。その側より念佛と。病僧苦惱と忘  
 らるる体より。と。眠られ。凡此病累年の事に  
 一。五体大にけられ。殊に近頃疼つ。言語大ふ  
 くる。暫も心より。と。と。珍しく寐入る。れ。  
 佛の光明先加する。と。同友も歡喜する。や。や。り  
 目より。我今迎接の勝相と拜り。佛  
 聖衆共に来迎し。と。我病と疲し。菴々と  
 の。中より。觀世音蓮臺と。我前にす















慈大悲もつゝ愚を身に染ぐとありて覺  
之侍る寛政の事なりと云ん

吉水大師曰。法爾の道理と云ふあり。かのほの  
そふのかり。氷のふりさふなる。菓子の中に  
すゝものあり。あやれたものあり。いふに法爾  
の道理なり。阿弥陀佛の本願。名号と云ふ  
罪悪の衆生と云ふ人。とらぬまひと云ふ。唯  
一向念佛と云ふ申す。佛の来迎。法爾の  
道理にて。いふに。翼賛に云。法爾とい自然

と云ふ。巧まぬ。おのづから。○来  
迎に念佛つとる徳分なり。唱ふを自然ふ  
なり。只あるが如く申すと本意と云ふ。まじり  
いふに思ふべし。いふに。不定ふす  
僻事ありと云。梅とまけ。酸と徳あり。まじり自然の  
徳用なり。已上翼賛願生の人。いふに。深く信  
むべし。等閑のむす。常念房のうとと證と  
る。



佐兵衛

日高郡千手川村に佐兵衛とて貧しきものあり。  
 幸來惡病と煩らる。醫療其驗をりたれど。四國順  
 禮をめぐり。業障と懺悔し。たれも現果の拙と悲  
 とおもひ。當來の苦報とおもはる。徳本行者に帰依  
 し。愚鈍念佛往生の旨と信じ。稱名常に怠ら  
 ず。一日佐兵衛きく煩うと聞ゆ。行者の家  
 へ。既に臨終に迫りたるを。枕上に入りて  
 ひく。十念とらづけらるる病人とて。いかに

それより行者と同音に念佛するを。數百遍。眠る  
 が。息絶え。時に應じ。光明燦爛として室内に  
 あまよく。いらるる。金沙と散るに似たり。行者のあり  
 ありと拜する。經より曰。光明遍滿其室。と定  
 らる。定往生の人なり。と。寛政元酉歳けり。なり。  
 本名法尼  
 法尼本名は。鹽津の人あり。性素朴なり。平生あつた  
 幼より。世事を樂まじ。帰敬三寶の心あり。つ  
 出家するを願ふ。三度やが手づから鬻ぎときり



如も。一女子<sup>カハ</sup>あるが親<sup>オヤ</sup>くく制<sup>セ</sup>してゆらん。そひく他<sup>タ</sup>ふ嫁<sup>メ</sup>せ  
 一む。さうふ徳本行者。日高郡にありて。勇猛<sup>ユウマウ</sup>に念佛を  
 勸<sup>サシメ</sup>りけり。けり。かふ詣<sup>ヨミ</sup>り  
 十<sup>ト</sup>里<sup>リ</sup> 法話<sup>ホフワ</sup>とき。日課<sup>ニツカ</sup>念佛  
 と誓<sup>チカ</sup>ふまのしる。きく。厭<sup>ウツク</sup>ひの心<sup>ココロ</sup>を。遁<sup>ト</sup>世<sup>セ</sup>  
 の。常<sup>トコ</sup>に思<sup>オモ</sup>ひけり。四<sup>シ</sup>国<sup>クニ</sup>と順<sup>ツ</sup>禮<sup>レ</sup>。紀<sup>キ</sup>三<sup>サン</sup>  
 井<sup>イ</sup>寺<sup>ジ</sup>に月<sup>ツキ</sup>叅<sup>サン</sup>。當<sup>トコロ</sup>所<sup>ノ</sup>法<sup>ホフ</sup>苗<sup>ネ</sup>寺<sup>ジ</sup>の觀<sup>クワン</sup>世<sup>セ</sup>音<sup>オン</sup>に日<sup>ニツ</sup>叅<sup>サン</sup>と。  
 皆<sup>みな</sup>是<sup>これ</sup>他<sup>タ</sup>なり。出家<sup>シュツカ</sup>遁<sup>ト</sup>世<sup>セ</sup>の志<sup>シ</sup>願<sup>ガン</sup>の。其<sup>その</sup>後<sup>ノチ</sup>徳<sup>トク</sup>本<sup>ホン</sup>行<sup>コウ</sup>者<sup>シャ</sup>。鹽<sup>シホ</sup>津<sup>ツ</sup>に來<sup>キ</sup>て。念<sup>ネン</sup>佛<sup>ブツ</sup>弘<sup>コウ</sup>通<sup>トウ</sup>せり。道<sup>ダウ</sup>俗<sup>ゾク</sup>  
 遠<sup>トウ</sup>近<sup>キン</sup>より羣<sup>グン</sup>叅<sup>サン</sup>せり。尼<sup>ニ</sup>に信<sup>シン</sup>心<sup>シン</sup>彌<sup>ミ</sup>增<sup>ゾウ</sup>。後<sup>ノチ</sup>夜<sup>ヤ</sup>の勤<sup>ジン</sup>

行<sup>コウ</sup>にあつんも。毎<sup>マ</sup>夜<sup>ヤ</sup>半<sup>ハン</sup>過<sup>カ</sup>り。夫<sup>ウ</sup>に隱<sup>カクレ</sup>る家<sup>イヘ</sup>と出<sup>デ</sup>。  
 行<sup>コウ</sup>者<sup>シャ</sup>の庵<sup>アト</sup>に。未<sup>ミ</sup>明<sup>メイ</sup>に家<sup>イヘ</sup>ふ歸<sup>カエ</sup>り。日<sup>ニツ</sup>日<sup>ニツ</sup>なり。世<sup>セ</sup>  
 渡<sup>ワタ</sup>る。常<sup>トコ</sup>ふ。心<sup>ココロ</sup>に。線<sup>セン</sup>香<sup>コウ</sup>。數<sup>スウ</sup>  
 を記<sup>キ</sup>す。日<sup>ニツ</sup>課<sup>カ</sup>十二<sup>ジュニ</sup>炷<sup>ソウ</sup>。怠<sup>タイ</sup>り。念<sup>ネン</sup>佛<sup>ブツ</sup>。厭<sup>ウツク</sup>ひの心<sup>ココロ</sup>日<sup>ニツ</sup>  
 と追<sup>オ</sup>う切<sup>キ</sup>を。今<sup>イマ</sup>の夫<sup>ウ</sup>も親<sup>オヤ</sup>も止<sup>ト</sup>む。出<sup>デ</sup>  
 家<sup>イヘ</sup>と許<sup>ヨ</sup>して。是<sup>これ</sup>とき。大<sup>オホ</sup>に喜<sup>ヨロコ</sup>び。寛<sup>カン</sup>政<sup>セイ</sup>六<sup>ロク</sup>寅<sup>イン</sup>歲<sup>サイ</sup>  
 十<sup>ト</sup>月<sup>ツキ</sup>十八<sup>ハチ</sup>日<sup>ニチ</sup>剃<sup>シ</sup>髮<sup>ハツ</sup>。年<sup>トシ</sup>來<sup>キ</sup>の宿<sup>シュク</sup>志<sup>シ</sup>を。遂<sup>ツギ</sup>願<sup>ガン</sup>譽<sup>ヨ</sup>本<sup>ホン</sup>  
 名<sup>ナ</sup>と稱<sup>ナ</sup>ぶ。時<sup>トキ</sup>に二十四<sup>ニジュウヨン</sup>歲<sup>サイ</sup>なり。世<sup>セ</sup>と背<sup>セ</sup>く墨<sup>スミ</sup>の衣<sup>イ</sup>  
 以<sup>もつ</sup>志<sup>シ</sup>。誠<sup>マコト</sup>に薄<sup>ウス</sup>く。人<sup>ヒト</sup>皆<sup>みな</sup>隨<sup>ツ</sup>喜<sup>キ</sup>の淚<sup>ナミダ</sup>と催<sup>サシ</sup>。



行者有田郡須谷村の古城山は絶頂に  
 籠居別行せる。本名同行は本曇尼ともふ。この山  
 みつり峯はひくしなる山の半腹に。くさむりなる柴乃  
 庵と引結び命を支ふ料を。月に三度里にいで  
 分衛する外は俗舎に立つ。始より本願念佛の  
 たのむく。なまじりせだ来迎し。るふやまの。單信無二に  
 稱名し。更に急う。し。峯にのり。薪と拾ひ。  
 谷に。づり。水と。く。皚々たる雪は。曉も嵐と忍ぐ  
 稱名し。冬も夏も。汗と拭り。禮拜と。鹽津

かゝる母の。送る。佛の御慈悲。たの罪人  
 と。迎。た。思。業障盡。で。帶。る。と。く  
 往。注。し。當。夏。の。く。春。と。送。る。秋。と。迎。る。覺。む  
 四年と過。寛政九年の夏重く煩ひ。た。を。く  
 此度必死と。み。ん。定。り。殊。ら。勇。猛。み。念。佛。一。往。生  
 此。時。と。し。ら。び。ける。或。日。女。一。く。快。る。を。ん。山。と。下  
 日。頃。檀。越。か。り。る。榮。助。の。も。つ。り。お。も。ろ。ふ。ふ。て  
 の。思。恵。と。謝。して。し。て。く。我。昨。夜。の。夢。に。一。丈。づ。り  
 なる。地。藏。尊。六。體。と。拜。し。奉。つ。り。命。終。り。も。ら。る。後  
 ト。と。ん。此。家。に。ま。あ。る。も。今。日。の。づ。り。す。べ。と。語。る。く







金色の觀世音菩薩。常に傍ふかりまん。圓光あり。目とひりけげんえ給つ辰。目と閉じれ常に拜ん  
 ころふと。此後臨終まじ常に拜んれまじつてあつる。え  
 ばふ為其勝友ならん。十三日の夜行者來り念  
 佛とまじらる。同音に念佛まじり數百邊まじりあ  
 傍の器とに。此内まじり光明まじり。十四日の晝  
 本勇に語まじり。今あまじり佛の廣大無邊まじり  
 とまじりと拜り奉る。光明照耀まじり。その内に數多の

化佛まじり。十五日行者まじり。十念を授らる。分明  
 にれまじり。前夜まじり病苦あり。此日一向安穩まじり  
 手げり握りて母とせ。漫々まじり海と向れ岸まじり  
 行者十念を授らる。息まじり。氣息ありまじり  
 時。寛政九巳歳九月十五日夜半。春秋二十七  
 歳まじり。此時鹽津まじり老母の本名臨終正念のまじり  
 一入夜まじり佛前まじり念佛まじり。夜







のこりける。女本名臨終の遺言。ふらくに穢土を  
 いとつて出家修行し。往生と遂んとしてつるべ。此  
 後は厭飲殊にふく。同年十月剃髮深衣の身と  
 かり。小庵にこもりて世事ともなれ。晝夜孜々  
 と稱名急ぐべ。俗ありし時ども日課念佛線香十  
 二炷と期す。一夏の中は日別三百禮急ぐべ。  
 況や出家の後八月六日齋戒と持ら。行業勇猛  
 精勤あり。同十年の夏病あり。胸中はうきく數日  
 なるふ。夢よく一人あり。小と俵と授く。うきく

唐崎明神の御供米なりと。もて慎ぶ。これと受て吞  
 とりて夢さる。その胸中のつと平癒せり。明年あ  
 る夜夢よく一堂にす。比丘僧數人あり。傍ふ牡丹の華  
 あびしく咲き。白四方小薰も。佛あり。ま。ころにま  
 く。これ我生く浄土の堂を。莊嚴も思ひあり。やどふ  
 かり。我念佛の功積らざるも。あるべし。夢さる。秋七月  
 かり病ふ。身体日に疲る。ふ於る。臨末の意  
 地ふ住し。藥餌と禁す。相續念佛も重病なりとい  
 ども。朝毎に佛前に出づ。勤行急ぐべ。八月九日につる



僧上品弥陀の像と拜す。尼喜び限り。香と  
 焼く懺悔し。速に御傍に参らる。迎へて。きた  
 り。念佛も。此後同行の諸人日夜さつふありて。助  
 念せり。十三日の夜同行さふ坐禮稱名し。曉にさる。  
 夜明く極樂寺の和尚と請う。十念と拜受と  
 和尚歸らり。後同行にさる。各拜さる。や  
 今此座敷の中に。數多貴僧あり。あつさる。と  
 念佛數遍さる。安祥と。息をさる。時に寛  
 政十一未歳八月十四日五十三歳をり。

静にす。此母子兩尼の無智の女人なり。いと  
 も。浮世と。夢幻と。身命と棄捨さる。と  
 塵芥の。と。頑丈も廉に。慥丈も  
 志と。宿世根熟の人ある。と  
 我輩幼き。剃髪し。百に一長を。と。ゆ  
 して。一生と。今此傳と。慚愧の涙  
 華と。下ふ。南無阿弥陀佛



令證童子

童子。俗名次太郎。鹽津浦の人なり。徳本行者此所  
 詣で念佛とて長てふ過り。とて通夜念佛  
 也。年ふづふ八歳をふ。他の童の竹馬に策うつあまひに  
 もやどつた。ある人木鉦とて之を喜ぶ。常  
 ふうらうき念佛とて遊び。年経ても怠らん。寛  
 政九已歳。やれた病に。母にいつく。我此  
 へ命終る。とて數度。それ母誠とて。閏

七月二日。卧ぶ。念佛と。常の。母もあや  
 隣の人来。次太郎合掌して念佛  
 病重と。母傍ふ。念佛  
 念佛と。命終。時年十二歳。爾勸令證童  
 子と

完道上人

上人別に廣運社濟譽義空と號も。海士の郡。藤  
 代鳥井村の産。布引村阿彌陀寺の主なり。  
 若年の頃より護法の志深く。檀林に掛錫



經論と涉獵し。深義と精研と。学成る後舊里に  
 歸る。師跡を補へ。此寺に住職し。天人法の  
 のふ心とゆゑ。名利の念と忘る。あまひ日本國中名  
 山靈跡の水とす。三經七軸と拜寫して。尊重  
 供養し。又他のふ。佛像經卷と修補と。なほ餘  
 長あれば。人と惠をなして。いさうも慳心ある。此  
 寺に住する。十一箇年。のち江戸に下向し。目  
 黒の光取寺に住す。つくなくもあく。本所回向院に  
 轉住し。第九世の住持なり。その寺勢漏がく。

道念はんくか。晝は三時の勤行。説法。施  
 食。臨時の法要等。なほくふれと勤修し。夜は常課  
 の念佛誓ふ息と。信州善光寺に燈煙と  
 以て。彌陀經二十五卷と拜寫し。これと府内二十  
 五箇所の元祖大師前。奉納と。常に無義語と  
 すべき。如法の行相と示し。古賢の跡と學ぶ。流  
 俗のうすまひあつ。自行のく。來学の  
 ためふた。内外の典を講し。正法と弘傳と。天明  
 元丑歳秋のころ。三經合讚と提唱し。それ冬



十月朔日。丑の剋くぐり。やと睡眠みんでぬ。勤学けんがく一々  
 精義しんぎと思惟しゆいしりける折まり。盜賊とうさく忍しのびへしもの音ね  
 一々いれど。屏風びやうぶのひき立たち出でらうと賊さくの見み付つけられ  
 と。刀やいばをけりしきりつる。師しのきこれかぎる聲こゑともよば  
 たる追出おしだえんとせりしる。五箇所ごかんとまが深手ふかて負おは  
 しゆ。ふふのまゝ小倒こたふした。息絶いきたりしとやあひひかん。さ  
 大おほとそんとうるを。盗人とうじんの呼よびしを。あつてそのま  
 逃にげりけり。弟子でし等ら此聲このこゑに驚おどきて。師しの前まへにつり  
 柱はしらにひりひり居からりしゆ。

あつてうさうた。それうさうさ呼集よびあひるまを。前住勝譽上ぜんぢゆうしやうぎやう  
 え人ひととくめ。皆々みなうさうさ来きる。まが良醫りやういとよめ。療治りやうぢ  
 薬用やくようとすしる。師し我われ生死しんじいんとす。醫師いし本多ほんた何なに  
 がうさう。深手ふかてをねが治ぢす。と師しをきて弟子でしに  
 命いのちト。鹿布しかふの直綴袈裟ぢくそと著ちやくし。百八ひやくはちの念珠ねんじゆとすり  
 正身しやうしん西面さいめん一い又手またて合掌がうぢやう一い念佛ねんぶつとす。弟子でし涙なみだ  
 とのうさう。盗賊とうさくの何なにものや。見覚みさかえも  
 一いまうとす。師眼しがんとひりてしる。それまが宿業しゆくごふと  
 はくまうとす。人ひととまるとも何なにを其名そのなとす



小忍ん。やして何あり。こぼるる。と。う。若。仇。と。して。仇  
 と。し。つ。其。仇。生。く。に。つ。つ。つ。ん。う。一。怒。親。順。逆。の。い。く  
 淨。刹。に。生。ま。ん。う。我。没。後。う。り。と。その。人。と。尋。出。え。ん  
 と。け。つ。の。生。々。世。々。師。弟。の。縁。と。う。ん。み。に。賊。に  
 う。と。我。為。の。真。善。知。識。を。り。今。う。ん。が。為。に。苦。界。と  
 い。づ。く。と。得。う。り。汝。等。若。輩。つ。う。け。る。く。信。行。具  
 足。ま。ん。と。三。寶。に。祈。求。し。て。う。づ。う。名。利。の。客。と  
 を。り。て。袈。裟。下。に。人。身。と。う。う。う。う。我。往。生。時  
 う。う。り。も。う。う。念。佛。ま。う。う。う。う。う。發。願。文。と。う。う。

侍人ふ木真とうとせ。念佛まう。凡二百餘遍。稱  
 名の聲。と。う。う。う。う。う。往。生。ま。う。う。時。年。五。十  
 四。歳。天。明。元。丑。年。十。月。朔。日。寅。の。中。剋。を。り。門。人  
 と。う。う。その。席。に。あ。り。う。う。人。々。師。の。深。手。負。を。う。怒  
 心。あ。り。う。う。正。念。明。了。に。念。佛。往。生。の。素。懐。と。遂  
 ら。れ。う。う。類。を。う。た。ふ。う。悲。歎。の。淚。袂。と。う。り。  
 念。佛。の。聲。室。に。う。う。う。う。う。看。侍。ま。う。門。人  
 に。う。う。侍。ま。り。

或問云願生念佛まうもの。過恒沙の諸佛菩薩







にからん心頭動せらるる泰山にぞく。其賊とぞる  
 小似しんも。怨ぶるこがらの忍満ふ似たり。佛力加祐令心不  
 乱えん。其平素の了る所とぞふたり。太田道灌陣  
 中ちゆう。若武者の首ふむひ。命のとり。あ  
 りてかた身と思ひそべり。口をきり  
なりつひに非なり。其家集。今濟譽上人の意樂もききこふべし。  
慕京集ふ上のりてん。  
 人深信して。経釋の誠實言と疑ふ。かたきり。あつて

南紀念佛往生傳卷之二終

新刻此南紀往生傳中卷喜捨助刻存歿名署

居士小倉恭壽。恭投清貨。隨喜助刻。母貞性。近住尼。妻室阿佐。  
 同家萬石衛門。妻室文省。資隨喜。相共。上酬佛祖之慈恩。下濟  
 法界之苦輪。又以此惠業。莊嚴歡譽淨喜禪門。淨譽清壽禪  
 尼。歡譽淨意禪門。正譽妙意禪尼。通譽淨圓禪門。淨譽知圓禪  
 尼。潤譽澤道禪門。理然了智禪尼。大譽圓覺禪門。洞譽淨鏡禪  
 門。貫譽宗徹信士。功譽德實居士。入阿圓證大姊。戒譽知品法  
 尼。深譽清心信女。廓譽廣道禪門。愍譽慈性禪尼。影現童女。嶺  
 光童子。智心信女。了融童子等之靈位。  
 俯希存亡共利。福惠轉增四恩三有。共出苦域法界有情。齊詣  
 樂邦。

享和二年戊七月僧自恣日

紀城西岸寺衆等謹識



